

≡ 文化財だより

第 36 号

令和 6 年 3 月

発行 真鶴町教育委員会

特集 真鶴と関東大震災

一九二三（大正一二）年九月一日、神奈川西部を広く震源とする大地震が発生し、首都圏に多大な被害をもたらしました。

この地震では揺れだけではなく、関東、特に神奈川県沿岸部には大きな津波も発生し、真鶴と岩の両村に被害が発生しました。家屋の倒壊はもとより、さらに岩村では、津波が村の中心部まで到達し、総戸数の二四％の家屋が流出しました。逆に真鶴村では、村内総戸数の五六％が地震による火災のため焼失しています。家屋の損失だけでなく、山林の崩落や土砂崩れ、柑橘園の被害も甚大でした。前年に開業した熱海線は、震災直後、根府川駅付近で発生した大きな地滑りにより、多くの利用客の命が失われました。車内には何人もの真鶴や岩の村民が乗っており、その時に亡くなっています。さらに震災の前年の一二月に完成した真鶴駅舎も、震災のため一年足らずで倒壊してしまいました。

地震の直後、真鶴村では、人口の九割の住民が、家屋を失ったため、地域の何力所かに避難し、人数のあ

まりの多さに食糧や水の配給も困難と混乱をきわめたと言います。

今回の文化財だよりは、関東大震災の発生から一〇〇年となるのを契機として、真鶴と岩の当時の状況を記録として留め、後世に語りつぐため、「真鶴と関東大震災」と題して特集をいたします。三木文化財審議委員からは「震災後の村の再生」、川口委員からは「岩地区の被害」について執筆いただき、また、土屋家から提供いただいた、二代目当主の康二氏が震災後に執筆した原稿「大震災の思い出」について、当時の真鶴と岩村の状況を語る貴重な資料として、震災後の小田原・横浜の様子も含めて抜粋、紹介いたします。



震災復興記念碑（貴船神社）

目次

特集 真鶴と関東大震災
関東大震災から村の再生へ
文化財審議委員 三木 宏
..... 2

関東大震災における
岩地区の被害
文化財審議委員 川口 仁齊
..... 4

土屋康二氏震災手記について
真鶴町教育委員会 新井 人志
..... 5

文化財審議委員会
研修視察報告
文化財審議委員 小関 雅則
..... 8

令和五年度文化財保護事業
..... 8

関東大震災から村の再生へ

文化財審議委員 三木 宏

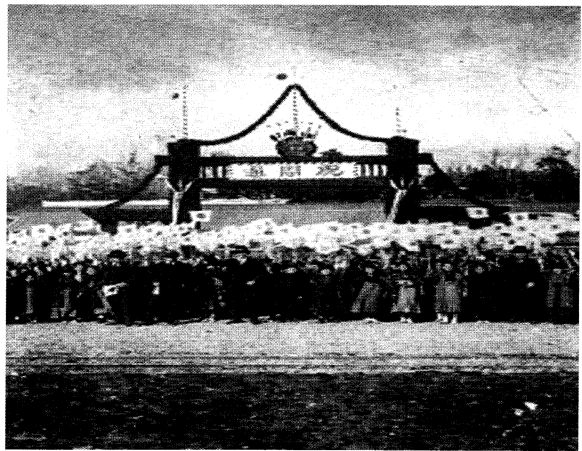
一月一日夕刻に石川県を中心として発生したマグニチュード七・六（最大震度七）の「令和六年能登半島地震」の犠牲になられた方に衷心よりお悔やみを申し上げ、被害に遭われた皆様の心身のご安穩を心より祈念いたします。その後、地震の発生数は増減を繰り返しながら対極的には穏やかに減少していきしましたが、地震波形を分析した結果、木造家屋に大きなダメージを与える周期

一・二秒の揺れが強かったことがわかっていきます。これは阪神・淡路大震災を引き起こした地震に匹敵するとも言われています。地震は大きな被害と悲劇を我々にもたらします。昨年、百年前に発生した関東大震災について神奈川県立歴史博物館を始め各地で特別展が開催されてきました。今回、真鶴地域が震災前後どのようなであったかをまとめてみました。

一九二三（大正一二）年九月一日に発災した関東大震災は、マグニチュード七・九と推定される巨大地震と、それに伴う火災や土砂災害、津波などによって関東地方を中心に甚大な被害をもたらしました。言う

までもなく震源地に近い真鶴の被害も大きなものでありました。百年前という隔世の感がありながら、関東大震災の記憶は発災から時が経つに従って生々しさを減じながらも、阪神・淡路大震災や東日本大震災といった直近の大震災と比較されながら現在まで伝えられてきました。先人の記憶を後世に伝えるためにも、真鶴町郷土を知る会の会報『真鶴』や取材テープの書き下ろし、そして『真鶴町史 通史編』を参考にしながら百年前の真鶴が置かれた時代背景を理解し、いかに大震災から先人が再生していったかを実感してもらいたいと思います。

一九二三（大正一二）年は、前年の一二月二日に東海道本線の国府津駅から分岐した熱海線真鶴駅開



熱海線開通祝賀式・真鶴駅

業により周辺町村に大きな影響を与えていました。当時の日本国内は第一次世界大戦後の世界恐慌のあおりから、不況は慢性化の様相を呈しており、大正デモクラシーの高まりとともに国内での労働運動はかつてない高揚を見せるようになっていました。このような国内外の影響を受けながら真鶴地域は熱海線の真鶴までの開通に沸き、後に続く湯河原、熱海までの開通に夢をふくらませていたのです。

また、熱海線が真鶴まで延長開通すると同時に、東京湾汽船株式会社が真鶴港に出張所を設け、従来の国府津から小田原、熱海、網代を経て伊東まで往復していた定期船を真鶴港に寄港させ、さらには真鶴港から直接伊東に向かう定期船を新たに就航させました。

箱根一二湯は不況と相まって高いと敬遠され、それにひきかえ鉄道・汽船により交通の便が格段にようになった湯河原、熱海、伊東の真鶴以西が都会の人たちの人気を集めるようになっていきました。こうした人の動きと相まって、真鶴地域の経済上の好調は将来の発展を予期させ、遠く志摩半島から海女（あま）が出稼ぎに来たのもこの頃のことでした。こうした変化と将来への期待を持った真鶴地域が運命の九月一日

を迎えることとなったのです。

関東大震災の前兆については、際立った前兆らしい出来事を指摘するものは見当たりませんでした。が、郷土を知る会が一九六七（昭和四二年）に行なった古老への聞き取り調査でもほとんどの人が前兆を感じ取れなかったというものの、漁師が語っているところでは、地震の一週間前頃から潮の動きが速く、船を丘にあげようとしても足元から砂が流されていつて苦労をしたという話を年寄りの漁師から聞いたというものが唯一でした。

調査の席上ある女性は、地震発生時の様子を次のように語っています。

「その日は漁から帰ったおじいさんに早めの昼食を出し、一時半ごろには食事は終わっていました。おじいさんがブドウ取りに行こうかと用意しているのを見た女性は、『今日はなんだかよしな、沖がひととおりでねえだ、紫色みてえになつているから見てみな』と言ったところ、それを聞いたおじいさんが沖を見て『ほうだの』などと言っているうちに、突然下から突き上げる上下の揺れに打ちのめされました。間もなく横揺れに変わりましたが、揺れは一向に収まりません、やっと揺れが収まってきたところで外に這い出して

目にしたものは、逆さまに倒れていく隣家の姿と倒壊によって様変わりした周囲の風景でした。」

家屋や電柱の倒壊は猛烈な土煙を引き起こしました。一時は土煙のために一寸先も見えないほどになり、こうした影響からか、スズメや鳥も飛ぶことができずに空から次々に落ちてきた話も伝えられています。土砂崩れも次々に発生し、岩の南丁場の端先（はさき）は崩落し、わずか一、二分で丸山まで埋めてしまいました。土砂崩れで一家全員死亡という痛ましい事態も起きました。が、岩や真鶴に多い石垣の崩れは被害をさらに大きなものになりました。

地震で約一・四m隆起した津波の目撃者によると真鶴港では、沖合



震災後の真鶴（1923年9月）



大震災直後の真鶴港（防衛研究所戦史研究センター）

五〇間（約九〇m）まで引き、その引き波の後に津波の第一波が襲来して港付近の倒壊家屋を流失させ、計三回来襲したと言われています。岩村海岸では真鶴以上の家屋が津波で流失しました。真鶴港を襲った津波にまつわる話には胸を締めつけられる話が多く、取材テープの中で語る古老の言葉には、こうした話は大半の人が知っており、広く言い伝えられている様子がうかがえます。

津波の被害は、「神奈川県震災誌」によれば真鶴村の流出戸数が六五三戸中一九戸（約三％）なのに対して岩村は流戸数二四五戸中五九戸（約二四％）と桁違いに大きかったのです。岩村を襲った津波は、現在の民俗資料館となっている旧土屋家の玄

関まで押し寄せたと言い伝えられています。それにも関わらず真鶴村の津波が多く語られる要因のひとつとしては古くより良港として栄えた真鶴港の地形が考えられます。それは、真鶴港は奥に入り込んでおり、そして海岸近くまで家屋が立て込んでいる関係から、三度襲った津波により人や家などが湾内を行ったり戻ったりした姿を、多くの人々が目にしたからだと思います。

震災は昼食準備の時間帯と合い重なり、火災による被害が各地で起きましたが、真鶴村における火災発生場所は個人住宅が四か所と真鶴小学校の合わせて五か所です。

震災後の避難場所としては、真鶴小学校裏庭および付近の畑地に約三千人、真鶴駅に至る県道沿いに約三百人、その他は周辺に点在する農家で敷地内の竹林等に避難し、集団での避難はなかったといえます。いづれにしても、当時の真鶴村の人口は三三二九人といえますから、村の人口の九割が真鶴小学校裏庭から真鶴駅にかけて避難をし、ひしめきあったことになります。

当時、四歳であった私の父は、祖父が石船の船長で不在であったため、隣家の従兄弟に背負われて避難をしたこと、度重なる余震の中で眠れない夜を過ごすものの、子どもに

は屋外での非日常的な生活が物珍しく楽しく感じた、と、生前に話していました。実際の避難生活では食糧と水の確保が大変だったと思われる。

記録では、真鶴村は玄米を購入し、九月二日夕刻から一日一人二合の割合で被災者に配給を始め約八五俵を消費し、岩村では真鶴駅前の各運送店から白米二〇俵を岩村消防組合頭の名で借用し配給したとあります。実際には整然とはいかなかったようです。組織的な救済が行われるようになったのは、沼津から海路で本格的に真鶴に食糧が運び込まれるようになってからでありました。

避難所生活が始まって、緊急の課題は飲料水の確保です。真鶴村は水不足の地域でありましたから、古老たちもこれを鮮明に記憶しています。飲料水を得た場所としては現在の石田保育園付近の泉と現セブンイレブン（旧亀屋）下の泉、海岸部の天神堂の湧水が利用されました。そのほか、大浜から道無（みちなし）に下る途中の御林（おはやし）の中に「じんじが井戸」と称される井戸があり、ここを利用する人も多かったようです。このあたりは「お茶の水」という地名が残されているように真水が湧き出る所が何か所かあります。

また、避難生活の中で困ったものの一つに夜の暗さが指摘されています。当時真鶴にも電気は来ておりましたが、震災で電柱は倒れて復旧されておられません。こうした中で、九月七日に救援物資を積み、清水港から小田原に向かっていた海軍の二隻の軍艦が風波のため物資を小田原に陸揚げできず、目的地を変更して真鶴港に停泊して救援物資を陸揚げしてくれました。そして夜には、照明機で村を照らしてくれたことが何にもましてありがたかったと実感がこもった話もあります。

震災後、戒厳令下の治安維持活動のため、真鶴には陸軍第六七連隊第二中隊が駐屯しましたが、治安活動のない中、もっぱら復旧活動で村の大きな支えとなりました。また、真鶴には以前から海軍の電信所が現ひなづる幼稚園一帯に置かれ、軍隊を身近に感じさせていましたが、震災直後に正源山（しょうげんやま）に避難した人々に食糧の配付を行ったり、電信所に入ってくる震災関係の情報を村人に伝えるなど、住民にとって他地域の様子を知る情報源となっていました。こうした軍隊の震災後の活動が大正デモクラシーの中で人々が認識を改める要因となったのかもしれませんが。

真鶴村の震災復興活動は、九月

二六日に本格的に動き出すことになりました。神奈川県各地では震災後の復興活動推進のため復興会が組織されていきましたが、横浜・鎌倉に次いで早い段階での設立ともいえます。村での復興活動は死者の収容、埋没した家屋等の掘り起こし、流失・半流失・焼失家屋の取り片付け、半壊家屋の立て起こし、交通の整理、食糧の運搬・配給等の様々な分野に及びました。こうして、一九二五（大正一四）年には真鶴駅と真鶴港を結ぶ真鶴停車場線の末に完成しました。岩村でも陸軍石丁場の払い下げを得て海岸に新しく真鶴駅とを結ぶ岩村真鶴停車場線が一九二六（大正一五）年に造られました。以降二年間の改修工事を経て、一九二七（昭和二）年に完全に工事が終了したのでした。こうして、震災復旧活動の中で、今日の真鶴地域の基幹道路が次々と完成したのです。その後、真鶴の築港が進み現在に至っていきました。



震災慰霊碑（岩ふれあい館）

最後に当時の人々が大震災から復興に尽力した姿から、過去を振り返りながら現在に努力し、将来に希望を持つための契機となれればと思います。また、来るべき大規模災害への備えについて各自が考える機会としていただければ幸いです。

関東大震災における岩地区の被害

文化財審議委員 川口仁齊

一九二三（大正一二）年九月一日、午前一時五八分関東地方を襲った大地震、のちには関東大震災あるいは大正の大震災とよばれ、南関東一帯また隣接の県に多大な被害をおよぼした大きな地震でありました。もちろん真鶴村や岩村（当時）でも被害は甚大でありました。

被害調査の具体的数値は真鶴町史に小田原警察署調べの具体的な記録が記載されていますが、実際に地震に遭遇した人の話からその恐ろしさや被害の様子を記述することに致します。

関東大震災から昨年は丁度百年経ち実際に体験した人で今でも生存しておられる方は一〇人を下回るそうです。

本稿では、土屋家の当主であった故土屋康二氏が昭和四年に「大震災

の思い出」として記述した文章や、岩地区における被害の様子を古老より聞いたことや自分たちの祖父父母や父母から聞かされたこと、特に筆者が実際に地震に遭遇したり被害にあった方より聞いたことを交えて記述し、その時の様子の一部を知っていただきたいと考えます。

筆者は岩地区の瀧門寺の住職であります。寺には大地震の七日前に出生し、崩れた石垣の下敷きになって父親を亡くしてしまった女性が今でも頭もすっかりし生活しています。この女性の話や、前述の土屋康二氏と同級生であった筆者の父、瀧門寺の前の住職、また明治一六年生まれの筆者の祖母などは実際に地震にあっていますので生々しく語る話でした。これらは断片的になりますが、実際に揺れを体験していますので真実味があります。

地震が来た瞬間「ゴー」という大きな音とともに激しい揺れに見舞われ、その激しさは、柱につかまっていなければどこかに投げ出されるような凄さだったと語りました。これを聞いて筆者も子供ながらに怖かったことが思い出されます。

寺では八月に毎年恒例のお盆と施餓鬼会の行事を行います。その際、本堂の部屋を仕切っている杉の戸をすべてはずして広い会場とします。

九月一日はその年の夏の行事もすべて終わったので朝から家族総出で後片付をしたそうです。

正午近くになってはずした大戸を元通りにしましたが、須弥壇の両脇の戸はまた明日にしようということになり、はずしたままにしておいたそうです。そこで地震発生となり、本堂自体がゆがんでしまったため、既にはめ込んだ杉戸はすべて細かく割れてしまい、戸の形を成さなくなってしまったそうです。

地震発生までは本堂の裏山には、天保四年に発刊された『相模風土記』にも絵図が登載されている瀧があった、一年中水が絶えることなく流れ落ちていたのですが、地震発生の後は水が止まってしまったそうです。このことから大地震により水脈が変化して、水の確保が困難になるといことがわかります。

土屋氏の文書の中にも岩地区の数か所で土砂崩れが発生し、死亡した方や重傷を負われた方がたくさんあったことが知られています。前述の寺に住む老女性のお父さんも岩地区の橋の上を通過中に地震に遭い、石崖が崩れて亡くなったそうです。岩地区に住んで薬売りを仕事にしていた方が細山地区を通過中に、やはり石崖が崩れて挟まれて負傷したそうです。

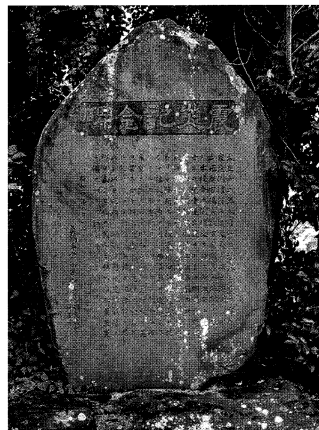
三・一一の東日本大震災のときには大津波が押し寄せる様子をテレビの実況放送で全国民が視聴しました。関東大震災のときも岩海岸には大津波が押し寄せて多数の方がその被害に遭いました。ここで特筆すべき点は、前述の小田原警察署の調査でも知られるように、岩地区は真鶴地区よりも津波による被害が断然に多いということです。

地震の日に叔母と叔父が祖母の言いつけで、真鶴までお使いに行きましたが、道端で相撲取草で遊んでいるときに地震が来たそうです。叔母と叔父は小学生であったので「お母ちゃん怖いよう」と泣きながら下駄を両手にぶら下げて、はだしで村中まで来ると「海の潮が引いて広場ができたので海へ逃げろ」と人々が叫んで海岸へ逃げたそうですが、そこへ大津波が襲ってきて多くの方が亡くなったそうです。言い伝えによれば、津波は現在の岩地区集会所の前の火の見櫓のあたりまで到達した（伝承）多くの家が流出してしまっただけです。（調査数字では五〇軒）岩地区の人命損失については、のちに警察よりの発表もありましたが、瀧門寺の過去帳の記載や被災者の話から推定できることがあります。

大正一二年の前後の年には瀧門寺の檀家の方は一年におよそ七名な

いし一〇名ぐらいの人が亡くなっています。大正一二年には七〇余人の方が亡くなったことが記載されており、その多さの原因は津波によると考えられます。

この時代には、地震があった後には津波が来る可能性があるという「啓発と学習」がなされていなかったのが、多くの人命が失われた原因の一つであろうと考えられ、啓発と学習の大事さを知らされます。



震災記念碑（現まなづる小学校）

土屋康二氏震災手記について

真鶴町教育委員会 新井人志

一九二三（大正一二）年、九月一日午前一時五八分、神奈川県西部を震源とする未曾有の大地震が関東南西部を襲った。この震災は津波も引き起こし、当時の真鶴村や岩村にも多大な被害をもたらした。

岩村出身で、石材業で財を成した土屋家の二代目当主土屋康二氏も震災発生時、岩村の土屋邸に夏の休

暇で滞在していた。そして、その瞬間とその後の様子について、後年に原稿用紙四〇枚程の手記に残した。この手記は、当時の岩村や真鶴村、さらに震災直後の東京日本橋濱町にある土屋商店の本店に向かう道中の湘南、横浜等の被災についても記されており、当時の状況を知るうえで非常に興味深い資料と言える。本稿では、頁数の許されるかぎり、この手記から窺える震災の様子について広く紹介したい。

この手記では冒頭、地震発生時の岩村の状況について克明に記されており、「突然ドンドンと大激動始まりぬ。直覚的にソノ振動の容易ならざるを感じ、（中略）その振動の急激甚大なる事と地上に立ち止ること能はずして、ヨロヨロとしては這ひ歩くに過ぎざりき」、「家も木も大洋の上の小舟の大浪に揉まるものの如く、庭の面の大松さえ左右前後にヨロヨロと方向全く定まらず。」と地震が起こったときの衝撃と大きさを物語る。

また、震災発生からしてほどなく村を襲った津浪が、村内の道を伝わって内部の奥まで拡がり、家屋の流出は真鶴より岩村の方がはるかに戸数や割合も多かった。その被災状況について「家も悉く流れ、人も悉く死したり、山々開墾地辺の崩壊、



故土屋康二氏

埋没の嘯亦頻々に在りて、兄は泣き、

親も叫ぶ。(中略)街中は、親を求め、子を求める人々の泣き叫びつつ狂奔する人々にて上下せり。誰が壊れた。家がツブサレタと叫びつつ走る人、吾子を見ずや、吾が妹を知らずやと会う毎に訊ねつつ、飛び行く人あり。」と混乱振りを物語る。

また、地震発生時は昼食という時間帯でもあり、火の使用も多かったため、真鶴村では火事が多く発生し、倒壊や流出以外に焼失した家屋の戸数は、岩村が○だったのに対して三六五戸と相当な数となった。

このように家屋の倒壊や流失、焼失により住居を無くした人々は岩、真鶴両村とも多数に上り、岩村では、大半の人が瀧門寺の竹やぶ周辺に避難し、この手記からは「各方、妻子を寺の藪中へと送るに、此の時は藪中は既に多数の男女に依りて充満したりき。階級は全く破れぬ。赤裸々になる実力の世となりて、他人の助けは全く望む可らずなりて心細くも亦緊張せざる可らざるを感じたり

き。」「寺の大門の前は負傷者の療養所、収容所となりて、戸板、戸板は負傷の人々を運び来り、苦しむ者、ウナル叫び、渴を訴え水を求むる者など全く惨憺たる有り様なりき。」と瀧門寺周辺の避難した人々の混乱と、秩序すらも著しく後退した状況が窺える。

村内に出来た他の避難場所としては、真鶴駅に至る県道(現在の大道)に三〇〇人程が避難したとあり、この岩村の避難場所と言えぬ状況により「城口あたりは山崩れ、水出での心配も無く、(中略)寺の藪を出で、布団なぞ背負ひつつ、一家一七人城口へと急ぎたり、城口には運送店前のレールの上に仮テントを張りて安全なる避難場所を拵えせしめたり。(中略)レールの間、駅の前空地には真鶴村の焼け出された人々の仮屋、テント張りが連りて此処にも一村落を現したり。」と康二氏は家族で駅前周辺に設けられた避難場所に移動し、その時の状況もこの様に細かく記述している。

震災前年の一二月に、国府津からの熱海線の真鶴駅が開業し、それがもたらした地域の活況に町全体が沸いていた。しかし一年と経たないうちに、この震災により、鉄道網は無惨にも破壊されることになり、真鶴に至る陸路からの交通手段は悉く寸

断された。

この時、根府川駅で発生した熱海線の列車転覆は、この震災による交通災害の中でも最悪のものであった。おりしも地震発生時、真鶴発東京行きの上り列車が根府川鉄橋の南隧道口の崩落により、機関士と火夫が死亡した。ほぼ同時刻に根府川駅に入ってきた下り列車は、停車する寸前に、地滑りにより四五mの断崖をころがり、海中へと没した。列車の乗客と、ホームで到着を待っていた人々併せて二四〇人も人が海中へと転落し、そこに津浪がやってきたため、生存者は四〇名ほどであった。

この手記では、その状況について「震災の日も、時恰も東京よりの下り列車が根府川駅に入らんとして忽ち数丈の断崖より落下し、折柄の津浪のため海中深く流失沈没して乗客悉く死せり。松本茂亦この時死す。熱海よりの上り列車は橋梁前のトンネル内にて震害に遭ひ、その前後の口を塞がれて、却ってトンネル内にて安全なるを得たり。」と書いている。この時に亡くなった松本茂氏とは、現在の松本農園の松本氏の祖父である。

さらにこのあと「亦県道は到るところ崩壊埋没して交通全く無く。海上浪甚高く、船舶殆ど流失して渡航

無く。」と記し、あらゆる交通手段が完全に寸断されてしまったことが窺える。

康二氏は震災直後にもかかわらず、日本橋濱町に自身が経営する土屋商店の現状を確認するため、地震発生の日後の九月三日には、使用人を伴って、このような状況下で東京に向かうことにする。小田原までは、かろうじて運航していた物資の運搬船に同乗して移動する。その船上で変貌した山の姿に驚き、小田原に上陸して灰塵と瓦礫の山と化した街の様子に悲嘆にくれる。

小田原からは全く交通手段が途切れてしまったため、線路沿いに徒歩により横浜まで向かう。途中、知人宅で一泊し、風呂や食事までも世話になり、ひと息ついたところで、さらに東京までの道のりを進んでいく。

また、手記の中では、当時、世間に広まっていた朝鮮人の襲撃の噂が頻繁に表れてきて、その噂に怯えつつ、列車の来なくなった駅構内に避難してきた周辺住民とともに夜を明かしたりした。また治安が悪化する中、夜更けに出発することもあったという。この時のことを「駅前には大部隊の兵士ありて満一に備えたり、鮮人来襲の為めなりと人々思う。(中略)鮮人数百群となして木、

棒を持して横行し、婦女子を虐殺するとの風評は横濱に近くに従ひ事実わるくなり。各村各所に自警団を組織して万一を取り締まる事万全なりき。どうせ眠る時は無いのだから夜涼と幸ひ一步も東京へ近づかんとての発議に賛同せしものの、夜中の旅行は危険なりとて中止を布告し、犯す者の生命委は保証せずとの事也、暫く夜明けを待ちかねて暗を明して出発す。(中略)諸所の石油タンクは尚、炎々として天に沖し、大小爆発の音喧しく、路傍には焼死者の死屍散乱せり」と記し、横濱近くの状況を克明に伝えている。

東神奈川に辿りついても、列車の運行は全くなかったが、幸いにもたまたま走ってきた被災者を満載した無蓋の貨物車に飛び乗ったが、この列車は崩壊した六郷橋の手前までで、そこからは徒歩で品川まで行き、そこから再び列車に乗って、何とか東京まで辿り着いた。

東京に着いた康二氏は、市内の親戚縁者の動静を確認しようとするが、震災直後の混乱の中、当然、車の手配もままならず、歩きまわりながらも何とか母親と義理の妹が、商店の使用人の家で無事であることが確認出来た。併せて親戚縁者も無事であったことが判明する。

震災による東京の被害の甚大な

ことは言うまでもなく、この手記では、東京滞在中に康二氏は、目の当たりにした被害状況も「一応室町焼跡を見舞はんとせり。お成門辺より四方一面焼野原にして、火災は燃え、煙さかなり。崩れたる石塀や、煉瓦の山の中、蜘蛛の巣の如くカラミ会える電線の塊を踏み越え、くぐり焼け付く様な突風の下を影と云ふ影は全く見当たらず街の中を濱町迄歩く、此処が跡やらサッパリ見当が付かぬ。河の水流れずして黒く濁り、焼け残りの木や板の内に、藁人形

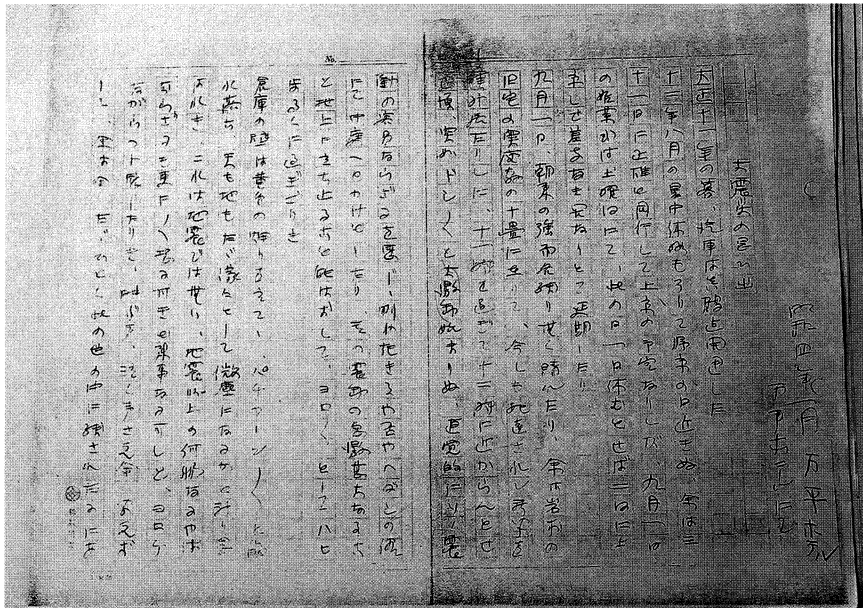
の如く手足を突っ張りたる焦げたる死体の所々浮びつつあるを見たり」と詳細に記している。

また「吾家の焼跡悄然として眺めやりぬ。新築一年位にして二万五千円計りの家屋忽ち灰になりぬ。而もその損害を左程にも痛惜せぬ程震災の災害は激甚、惨憺たるものなりしなり」と多額の費用をかけて建てた新築の土屋邸も全焼してしまっていた。

康二氏は土屋商店と母親、親戚縁者の現状を確認し、現金、債券等の処分の手配を使用人に頼み、岩村に残した家族のため、すぐさま東京をあとにする。東京に来たときよりは、幾分か交通の状況も回復し、一日で国府津まで辿り着き、前川から海岸沿いに徒歩で帰るが、石橋を過ぎたあたりで状況は一変し、土砂崩れで多数の岩石が行く手を阻み、断崖絶壁を木の根を掴みながら、死と隣り合わせのような状況の中を進み、長坂、そして真鶴まで再び帰ってくるのであった。

土屋家の所有船のうち、震災発生時に東京にいて唯一無事だった観音丸は、

土屋康二氏原稿(写し)



関東大震災における真鶴村・岩村被害

住家被害

	総戸数	被害戸数					計	無害戸数
		焼失	流出	埋没	全壊	半壊		
岩村	245	0	59	11	78	71	219	26
真鶴村	653	365	19	3	95	171	653	0

罹災者数

	総人口	被害人員				計	無害人数
		焼死	流死	憤死	不明		
岩村	1,380	0	10	49	5	64	1,275
真鶴村	3,329	67	5	39	5	116	3,100

「神奈川県震災誌・1927(昭和2)年9月30日神奈川県発行」より

発動機を搭載しているということもあり、震災後に食糧買い出しや物資の運搬等で暫くは活躍した。

この後、家や店の再建等のため康二氏は奔走していくこととなる。

文化財審議委員会研修視察報告

視察日 令和五年十一月一日(火)
視察地 神奈川県立歴史博物館
神奈川県立図書館

文化財審議委員 小関雅則

本年度は、関東大震災から一〇〇年の節目を迎えるにあたり、「文化財だより」の特集テーマを「真鶴と関東大震災」として取り組み、研修視察先を神奈川県立歴史博物館の特展として開催される『関東大震災原点は一〇〇年前』を見学し、県立歴史博物館と同一歩調で企画展示をする「神奈川県立図書館」の『関東大震災一〇〇年 神奈川県の被害と復興』を見学する計画をたてました。実施日を九月八日(金)に設定しましたが、台風一三号の接近により前日判断で当日の実施は中止し、後日延期して実施することとしました。台風による延期で、県立歴史博物館の『関東大震災一〇〇年』の見学は出来なくなりましたが、年間スケジュールの中で特別展『足柄の仏像』が一〇月七日から十一月二六日まで開催され、真鶴町から「瀧門寺」の石仏二軀(一面観音菩薩像と菩薩座像)の展示もあり研修会実施日を十一月一日(火)と決定しました。

同日は九月と異なり、晴天の中横浜の県立歴史博物館に到着しました。

県立歴史博物館の建物自体、国の重要文化財に指定されている「旧横浜正金銀行本店本館」です。

特別展の『足柄の仏像』は、足柄地域の仏像を県立歴史博物館として初めて展示したものです。今回、足柄地域にある国指定文化財の彫刻三件四軀、県指定重要文化財の彫刻一三件二八軀を含む約八〇件の仏像・神像・肖像彫刻、仮面が公開されていて、多くの仏像等が当該寺院等で非公開になっているものが多く、良い機会に研修会が実施できました。

午後から、昨年九月にリニューアル開館した四階建ての県立図書館本館を見学しました。

横浜の紅葉坂を桜木町駅方面から上がって坂の頂上右手にあり、ほぼ全面をガラス貼りにした明るい建物です。

最先端の技術による貸し出しシステムやオンラインデータベース、各フロアにある読書スペースや学習スペース、研究個人ブースやディスカッションルーム、又収蔵庫に入っている書籍や新聞記事・写真・資料を調べられるなど今までの図書館というイメージの「本の貯蔵庫」とは異なる

多岐にわたる設備の図書館でした。

海外からの視察もあり、令和五年一〇月にはベトナムから政府関係者の視察もあつたり、新装開館し中がガラス越しに見え、明るい雰囲気図書館を利用してもらえるためか、若い人の来館が増えたと案内をして頂いた県立図書館の職員から話がありました。

今までの本館は、設計者前川國男館となり、記録フィルムの上映や貴重な資料の展示などを行う予定で、収蔵館と共に現在改修中となっています。

県立図書館では企画展示『関東大震災一〇〇年 神奈川県の被害と復興』で、神奈川県の被害の様子や、復興の歩みを書籍からパネル化した展示物、当時関東大震災にあつた個人の手紙、当時の様子を書き記した書籍や雑誌、被災状況の写真や新聞、航空写真を見学することができました。



研修視察 (神奈川県立歴史博物館)

令和五年度文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業

・文化財だより第三六号発行

・町民センター展示事業

昔の生活用具展 (4/11 ~ 5/28)
幼稚園・学校の歴史展

組紐展 (5/30 ~ 7/2)
(7/4 ~ 8/27)

貝類圖絵展 (8/29 ~ 10/29)
色々な法被展

刀展 (10/31 ~ R6 1/27)
(R6 1/31 ~ 3/31)

・民俗資料館展示事業

端午の節句展 (4/8 ~ 5/28)
貴船まつり展 (6/3 ~ 8/27)

如来寺石仏写真展 (9/2 ~ 11/26)
お正月展 (12/2 ~ R6 1/28)

桃の節句展 (R6 2/3 ~ 3/31)

◎文化財保存事業

国指定重要無形民俗文化財

・貴船神社の船祭り

町重要伝統文化行事

・岩兒子まつり

・岩海岸どんと焼き

・岩海岸灯籠流し